

人・街・ながた 震災資料室ニュース

2007. 6. 17

発行人 寿 広文

編集人 武川泰恵・藤原美紀

阪神淡路大震災に学ぶ初期初動体制

東京・新宿区防災担当者が来室

6月8日、東京・新宿区危機管理課の田中栄成さんと市田亮さんが来室され震災当初の初期段階（72時間）の状況を避難所日誌や食事配給綴り・カード等を調べられた。また、中越地震や能登地震での救援物資の有り方について意見交換をおこなった。

長楽小学校避難所日誌

震災当時、自治労ボランティアで来られた東京の皆さんは2ヶ月間長楽小学校（現駒ケ林小学校）で避難所運営をされた。NIRO（新産業創造研究機構）の中平泰男・橋寺晋研究員が作成した避難者分布図を見ながらお2人は避難行動特性や対策本部体制を分析された。

長楽小学校区の人口は5,033人、世帯数は2,056世帯で避難者3,000人のうち1,700人が学校で就寝された。校区内は避難所までの距離が遠い所で500mと比較的近い。

校区内避難者は長田区の平均は85%で高い割合を占めているが長楽小学校では2・3日後に発生した千歳・二葉地区の火災により千歳小・二葉小両校からの避難者が増加したため割合が48%と低くなっている。

巨大都市・東京の課題

お二人は抱えている課題として1、区民の自治会加入率が50%未満 2、雑居ビルが多い 3、多国籍の外国人が多い（非定住） 4、住民異動が早く実態把握が困難 5、職員の通勤時間が長い 6、体感地震が頻繁に起こっている。

また防災指令は携帯にメールが入りメール



で返答する仕組みと述べられた。

救援物資についてはシャンテがいう「第2の災害にしてはならない」を理解しつつ「送らねばならない気持ち」であるとも語られた。罹災証明・義援金・職員参加等々貴重な意見交換が行われた。

先日はお忙しいところ有り難うございました。初日は人と防災センター、2日目に資料室に寄らせて頂きました被災時、実際に住民と向き合うことの大変さを実感しました。同じ行政の立場として辛いと思うことも多いですが、当時のことを聞いて人間の強さみたいなのを感じました。感謝します。

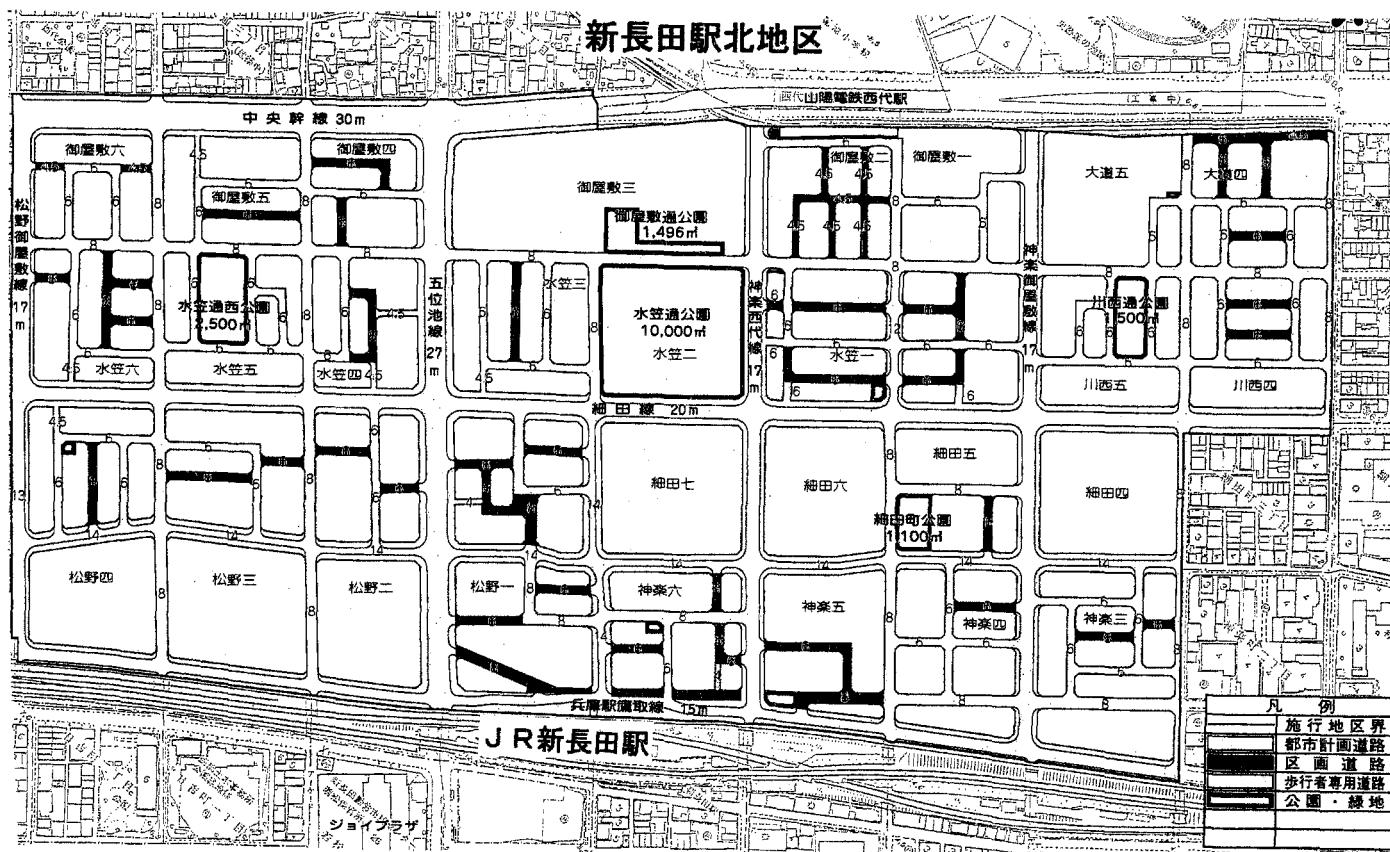
2007、6、12

E-Mail:

shinsai_shiryoshitsu@office.city.kobe.jp

新長田駅北地区の現状

4回の国勢調査を比較して⑦



新長田駅北地区は西端は須磨区境、東は新湊川手前、北端は山陽電鉄、南はＪＲ神戸線に囲まれている。都市計画上の用途は工業地域、近隣商業地域、準工業地域が入り混じっている。表に被災状況をあげたが、須磨区境一帯は大火に見舞われた地域である。

新長田駅北地区の被災状況

町 通	全 棟 数	全壊・焼率
大 道	52	84.6%
川 西	344	80.2%
細 田	110	57.4%
神 楽	295	74.8%
御屋敷	457	81.5%
水 笠	750	79.6%
松 野	507	72.6%
合 計	2,515	77.18%

ニュース113号で注目する町・通として川西4・5丁目、水笠1～6丁目、松野1～4丁目あげた。

それぞれ街の特徴があるが、共通しているのは私道（路地）がなくなり公道になったこと、棟続きの家屋（長屋）が戸建てに変わり、どの家もマイカーを持つことが可能になった。ただ敷地の都合で、戸建ての場合、木造3階建カラーベスト葺が増えたと言える。

川西通の人口回復率が小さいのは他に比べてマンション（共同住宅）の建設がなかったことによる。

また区画整理事業を進めるにあたって大規模建物は現況のままとなった。（現地換地）

例示するとNTT神戸西支店、関西電力変電所、長田郵便局、県警長田寮、ひまわり銀行、兵庫信用金庫などである。